

東日本大震災から2年～節目の迎え方～

復興庁 ボランティア・公益的民間連携班

上席政策調査官 田村太郎

次の3月11日で、東日本大震災から丸2年になります。復興に向けて、被災地ではこれからどんなことがどのように進んでいくのか。この1年間にあった新しい動きや、これから先の1年にどんなことが起こって、どんな効果が期待できるのか。節目節目に振り返って、これまでの被災地での経験などをもとに見通しを立て、どんな課題があるのかを共有することは、被災地の人々にとっても、また被災地を応援したり支援したりする人々にとっても大事なことでと思います。

阪神・淡路大震災の被災地では、震災があった1月17日に、これまでの1年をきちんと振り返って、次の見通しを立てるような節目にすることを、毎年丁寧にやってきました。1月17日は概ね次のように迎えます。地震が早朝だったので、前の日、1月16日の夜から集まり始めて、夜通し1年をふりかえる話をします。前夜から各地でロウソクを灯すイベントが開かれ、真っ暗闇の中で震災をふりかえり、この1年も大変だったよねとか言い合いながら、不安や希望を共有します。地震のあった午前5時46分はちょうど夜明け前です。黙禱を終えると、うっすら明るくなり始め、やがて陽が昇って来ます。「ああ、朝が来たなあ」と思い、めいめい家路につきます。明るくなってからは家族との時間です。震災で亡くなった方には命日になります。朝日が昇ったところで区切りをつけ、そこからはまた別の大事な一日として過ごすわけです。夜から朝にかけてそういう過ごし方をしていると、一年間大変だったけれどまた陽も昇る、という気持ちの流れができます。

3月11日の迎え方にも、そういう、リズムというか、「型」のようなものが徐々に形作られていくのだろうと感じています。昨年は慌ただしいままに3月11日を迎え、とりあえず1年間が終わった、というような気持ちの方も多かったのではないのでしょうか。次の3月11日も同じようにバタバタと過ごしてしまうと、3年、5年と時が過ぎたあとで、これでよかったのかなと思う方もいらっしゃるかもしれません。1年1年をどういうふうにふりかえるのか、希望を持てるようなふりかえり方をするにはどうしたらいいのかを考える時期なのだと思います。2年目をしっかり振り返り、次の1年間が見通せるような迎え方をすることを、みんなで考えることができればと思いますし、また次の1年間もボランティアが役に立てることは何かを考えたいです。

3月11日の節目をどう迎えるのか。外から支援しようとする人は、どちらかというとイベント的に迎えようと考えてしまうと思いますが、地元の人の中には厳かに迎えたい人もいます。被災地で暮らす人々のさまざまな気持ちに配慮しながら、ボランティアはどう関わるのかということも慎重に検討し、また、被災者の方が、今後も日々を安心して過ごすためにはどうしたらいいのかを考える時期です。みんなで、丁寧にその日を迎えましょう。